民族衣装・マロンを縫う

―職業教育の推進と就学前教育の開始―

（ひろしま祈りの石国際教育交流財団助成）

事業２年目の今年は、昨年購入した足踏み式ミシン１台を使って男女ともにマロン作りに挑戦しました。1巻き 100mの布をカットし、出来上がり寸法約1m×1.7mの筒状に直線縫いします。ミシンを見るのも触るのもはじめての生徒にはなかなか大変だったようです。

完成！

実習にこの縫製を取り入れた背景には、以前の会報でお伝えしたように、貧しい生活の中で民族衣装であるマロンを新調できないという状況があるからです。奨学生プロフィール写真、卒業式、村のフェスタなど必要な場面では、子どもたちは親せきから借りて済ませています。当会が２年前からブラクール卒業生にマロンを贈呈することにしたのもそんな経緯からでした。これからは、卒業式に自分で縫ったマロンで式典に臨むことになります。

ただし「マロンを縫うこと」は民族文化の継承という点では意味がありますが、縫製技術という点では基礎縫いでしかありません。少しずつ技術レベルを上げて、ブラクール校の制服縫製を受注するような卒業生が現れたとき、初めて事業の目的を達成したことになります。

この事業では、他にも大工、鍛冶、農業、畜産、食品加工などの計画があります。ブラクールの技術職業授業は、小学校高学年から毎日1時限設けられており、ハイスクール終了時に収入につながる技術習得も不可能ではありません。町に出るのか村に残るのかという自分の進路にあわせて、何か一つ、生きる糧となる知識・技能を身に付けて卒業してほしいものです。

本年度事業で始めた就学前教育も順調に進んでいます。小学校１年のカリキュラムは幼稚園での読み書き習得を前提としています。ブラクール小学校でも来年の６月には、アルファベットの読み書きができる１年生を迎えることになり、教師たちも大きな期待を寄せています。

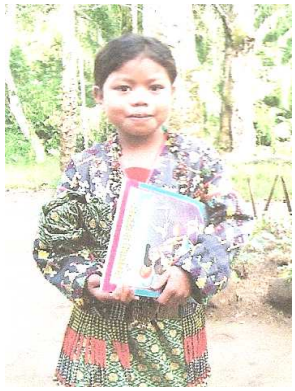
2009 年度はさらに学習効果を高めるため、週３回の給食の予算（30 人分月 5,500 円）を含めた助成を申請しました。

定期教育支援コーナー

―ブラクール奨学生の里親探してます！―

現在 25 名の会員によるブラクール支援は、5人の小学校教師の給与に充当しています。同時にHANDS 奨学生は、授業料月額 30 ペソの免除と制服代支給があります。

PFP から９月下旬に奨学生の現況報告が届きました。また支援が必要な子ども数名のデータも一緒です。以下はバベ・ジョイちゃんのプロフィールです。

マノボ民族の踊りや祖母から教わった民謡が得意な１年生。11 月 15 日に 10 歳になります。農園で働く父親の僅かな賃金と、母親が山の畑で作る芋や野菜で生活しています。生活は苦しいけれど両親は子どもの教育にとても熱心です。	

―CMIP 奨学生新システムのメリット―

経費節減とドロップアウト対策として、全寮制をやめ、自宅から地元の公立ハイスクールに通うように改めて半年がたちました。ディレクター・ノノイ神父、モニター担当スタッフのリコとロウエンダの評価はともにプラスです。親としても、子どもがどんな勉強をしているか、友達関係はどうかなど目が行き届いて安心。子どもは親の苦労がわかる。寮では食費も支給されていましたが、学校と通学の経費のみになりました。